

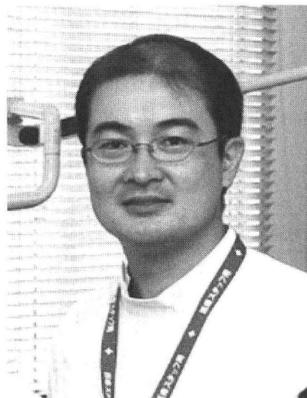
# シンポジウム 「子どもの事故と小児歯科」

## 歯科外傷データベースの構築

－虐待発見への応用をめざして－

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 小児歯科学分野

日高 聖



### 略 歴

平成9年 九州大学歯学部卒業  
平成13年 九州大学大学院歯学研究科修了（小児歯科学）  
平成13年 米国 NIEHS/NIH 博士研究員  
平成15年 同研究所にて日本学術振興会海外特別研究員（NIH）  
平成16年 産業医科大学医学部助手（生化学）  
平成19年 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科助教（小児歯科学分野）

産業技術総合研究所の山中らは、事故による傷害の予防を社会全体で担うための社会基盤である「安全知識循環型社会」の構築を試みている。安全知識循環型社会とは、事故発生から事故対策までをループ状に繋ぐことによって重篤な事故を予防する社会システムで、そのループの最初の段階が医療機関での事故情報収集である。

虐待などの意図的傷害を含めて傷害が発生した場合には、歯や口唇など口腔領域を受傷している場合が多い。そこで我々は、産業技術総合研究所で開発された傷害データ収集システムを歯科領域に応用し、長崎大学病院小児歯科室に加えて長崎小児歯科臨床医会に所属する14施設に協力を仰ぎ、外傷を主訴に来院する患児の受傷状況に対して調査を行う「歯科外傷サーベイランス」の運用を2009年12月より開始した。これまでに169件の事例を収集し、産業技術総合研究所の解析協力によって口腔内での外傷受傷部位地図を作成した。

口腔外傷の場合、その傷害が事故によるものか意図的傷害によるものかを客観的に判断することは極めて難しい。一方、適切な口腔ケアが施されず（デンタル・ネグレクト）、したがって口腔衛生状態が極めて悪い被虐待児の事例が多く存在することが予想される。したがって、外傷の診察と同時に口腔内の状態を確認できる小児歯科医は、虐待を発見しやすい立場にあることは間違いない。

「虐待かどうかの判断が難しい」「違っていたら怖いので通報できない」という現場の意見に対応するためにも、歯科外傷サーベイランスを継続して口腔外傷の実態調査を積み重ねることにより、安全知識循環型社会の確立と同時に、意図的傷害かどうかの判断の一助となるような裏付けが得られることを期待している。